

第25回 全日本大学男女選手権大会

●平成2年8月18日(土)～20日(月)
 ●女子・石川県金沢市営専光寺ソフトボール場
 ●男子・石川県野々市町民野球場也

●男子28、女子20チーム参加、来年度国体を控え万全の準備で開催

第25回目を迎えた表記大会は女子が「森と緑の都」金沢市で、男子は「文化学園の町」野々市町で開催された。

開会式は当初予定されていた野々市町民野球場があいにくの集中豪雨に見舞われ体育館に変更。男女選手団が会場に整列し、その中を各大学のプーラカードと旗手・主将が入場行進、これを野々市中学のバントワラー18名が先導した。

女子 日本体育大学、3年ぶり14回目の優勝

東京女子体育大	0	0	0	0	0	0	0	0	0
日本体育大	2	0	0	0	0	0	0	0	X
2x	0								

3年ぶりの王者返り咲きを狙う日本大は、1回戦は大阪体大に苦戦したが7回に二塁打の高島を犠打で送り1番内田の右前安打で1点勝ちの辛勝。2回戦の武庫川女大には初回に2本の三塁打で2点、3・6回にも追加点をあげ楽勝した。続く福岡大を2対0、大阪成蹊女短大にも3本の長打を含む10安打で3対0で順調に決勝に進出した。決勝の相手は東京女子体大、初回に長打と敵失で2点を先制、そのまま逃げ切り14回目の優勝を成し遂げた。日本大の宮崎監督に尋ねたところ、

打倒東女体を目標に毎日の練習に励み、特に守備練習に時間を費やしてきたとのこと。またエースの田中知美投手の成長ぶりに目を細めて喜んでいました。事実、田中投手の今大会の成績は5試合31イニングで失点・自責点ともに0、打者104名に対し被安打11、四死球3、奪三振16は見事な成績といえようし、1年生投手山口も2試合4イニングで失点なしの記録だったのも連続優勝へ向けての宮崎監督の構想のようだった。一方、このところ3年連続3位に甘んじた東女体は準々決勝の対帝国女子大戦で犠飛を挟み新記録の3連続三塁打で6対1、準決勝の日女体戦も3本の長打を含む9安打で5対0と調子を上げて決勝に臨んだが涙を飲んだ。

男子 東海大学、5年ぶり2度目の栄冠

東海大	0	1	0	0	0	0	1		
中京大	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0								

この後、源田久男大会競技委員長が開会を宣言。続いて優勝旗の返還があり、松田岩男全日本大学ソ連盟会長、黒木幹夫日ソ協専務理事があいさつ。小笠原隆石川県体局長が祝辞を述べた。最後に葛谷久典長野大主将と萩原千佳上越教育大主将が並んで選手宣誓し、熱戦と健闘を誓った。本大会は、国体を来年に控えているだけに運営は万全、ボランティアのお年寄りから婦人会のサービスマまで関係者一丸となって大会成功のために一生懸命だったのが印象的だった。

2回表、東海大は6番豊島が敵失で出塁。二死二塁で8番朝比奈への3球目に代走栗原が盗塁、4球目が暴投となって先制。試合の主導権を握った。7回表にも4番橋本が左中間に二塁打二死三塁で敵失を誘い追加点を入れ優勝を決めた。一方中京大は、6回裏2つの四球と敵失で無死満塁の絶好の逆転機を迎えたが、豊島投手の巧みなピッチングにひっかかり後続を断たれホームを踏めなかった。東海大は対戦の全試合を完封で退け、大学日本一の座に輝いた。



野々市町体育館での開会式



好評の“じょんがらソーメン”

この特別実行委員会は、婦人会や各種スポーツ団体に呼びかけて結成され、事務局、集団演技、接待、記念品作り、切り切っていた。

町民の真心と、町特産のキウイ入りそうめんを味わって——と、石川国体リハール大会の会場で、町の婦人たちが組織した大会特別実行委員が昼食時に、そうめん7百食を無料サービスした。

“じょんがらなべ”をサービスすると張り切っていた。

衛生の5組織を設け、国体のリハールを兼ねて取り組んでいた。

婦人会の余興、大会に華添える

開会式で予定されていた地元婦人会の「野々市じょんがら踊り」が雨のため中止となったが、翌日の競技開始に先立ちエキジビションとして野々市町民球場で披露された。

踊りの輪が笛や太鼓、三味線の鳴りに合わせてボールをかたちどった円形から始まり、最後はV字の輪に開く演技に、選手や観衆から大拍手がわき試合前の両ベンチも緊張感をやわらげていた。

野々市町の町民一人一役奉仕

子供会から老人会まで、国体を成功させようの合言葉で大学選手権を国体リハール大会と称して支援した野々市町は、国体準備一色。

その中で目に映ったのが、子供から老人まで早朝7時になると会場周辺の美化作業奉仕活動だった。お年寄りたちはそろいのユニフォームで片手に袋軍手姿で道路脇の紙くず、缶ジュースの空き缶を拾い、環境の整備に汗を流していた。

女子担当・日ソ協記録委員上坂 衛
男子担当・日ソ協記録委員長縄雅誠

